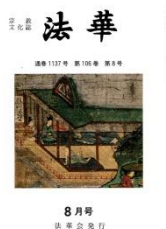


宗教文化誌 法華 8月号（通巻1137号 第106巻 第8号） 法華会発行

◆人生の探求 ―わたしの虚空遍歴― 八.わたしは、人生から、是のように学んだ

著者：東京医療保健大学教員教授 小林信三



・ルルドの奇跡とは

ルルドの奇跡については、キリスト教の信者が少ない日本ではあまり知られていませんので、少し長くなりますが、ご紹介したいと思います。

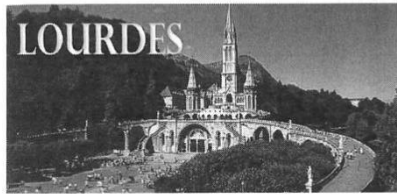
1858年といえますから、明治になる十年ほど前の2月11日のことです。フランス南部のピレネー山脈の麓の寒村、ルルドで奇跡が起ったのです。

この日、14歳になる少女ベルナデッタは薪を拾うため、マッサビエルの洞窟の付近に行きました。すると、彼女の目の前に「無原罪の聖母マリア」（キリストの母であるマリアは、人類が背負っている原罪から免れているというキリスト教の教義）が出現し、足下から泉が沸きだしたのです。

この湧き出た水を飲み、その水に身を浸すと、難病が治るということがしばしば起こったのです。「聖母マリア」による奇跡が起こったという噂が、たちまちヨーロッパ中に広まりました。不治の病気を抱えた人たちが、最後の頼みの綱とばかり、列車を連ねて、ルルドに押しかけるようになりました。かくして、ルルドはローマ教皇ピウス九世により聖地として正式に認められ、重要なカトリックの巡礼の地となりました。

彼女は、その後ヌヴェール愛徳修道会に入会し、修道女になりましたが、「神々に愛される者は夭折する」と言われるように、35歳の若さで他界します。死後55年目の1933年に、ローマ教皇ピオ11世によって、列聖されたのでした。彼女の写真は何枚も残されています。写真に撮られたカトリック教会の最初の聖人なのです。

ルルドは今では、年間400～500万人の巡礼者が訪れる聖地となっています。マッサビエルの洞窟と、そこに立っている聖母マリア像、そして湧き出した泉を模した構造物は、カトリック系の教会にはしばしば見受けられるところとなっています。



カトリックの聖地ルルド…年間 500 万人近くの巡礼者が奇跡を求めてこの地を訪れる。

写真出典：ルルド巡礼センター
ホームページより

・カレルの目の前で、「奇跡」はこのようにして起こった

心の中にはいつも、「信仰」について、鬱々とするものがあったアレキシス・カレルは、ルルドで病気が癒されるという「奇跡」の評判を聞き、真実であるかどうかを確かめたいと思いました。

幼少のときはカトリックの「信仰」の道にいたものの、長じて、「無神論者」となっていた彼は、「奇跡」など起こるはずないという思いを持っていたのです。なかば懐疑、なかば期待を込めて、1902年夏、この噂を確かめるべく、巡礼団の付き添い医師としてルルドに旅立ちました。

「奇跡なんか起こるはずがない」と「科学者」のカレルはいいます。

「奇跡が起こるならこの目でみたい。聖母マリアの「奇跡」が目の前で起こるならば、「信仰」を取り戻せるかもしれない」と「無神論者」のもう一人のカレルはいうのです。

付き添い列車の中で、彼は結核性腹膜炎で危篤状態にあった一人の娘、マリー・バイイにつとに着目しました。

彼は、「この娘が助からないのは、医学的にみて明らかだ」と思いました。「彼女が、霊水場で死ぬようなことになったら、巡礼者に及ぼす影響を、知りたいものだ。僕には、「奇跡」の失墜となるように思えるのだが…」と思う一方、「あの娘が霊水場の入り口に、生きて戻るその姿を再び見せ給い、我に「信仰心」を与えられんことを！」とも祈ったのでした。

彼女が、ルルドの泉に浸かって数時間の後に、カレルは、彼女の顔色に、赤みが差してくるのを観察しました。回復している様なのです。

と、突然、カレルは自分が、真っ青になっていくのを感じました。彼女の炎症で腫れ上がった下腹部にかけてある毛布が、段々と平らになっていくのを見たからです。

数分の後、彼女の下腹の腫れは、まったく引いてしまいました。カレルは、気が狂っていくような感じを味わいました。マリー・バイイに近寄り、「気分はどうですか」と尋ねます。彼女は、「とてもいいわ。身体はそれほどしつかりしませんけど、治ったような気がし

ます」とはっきり言うではありませんか。

症状が消え失せ、肉体的機能が回復するという現象を、彼は目の当たりにしたのです。医者としての、科学者としてのカレルの目には、完全に自然の法則から逸脱した現象に映りました。

人は、まだ自然の法則のほとんどを知らない。

いつの日か、今、目の前で起こったルルドの泉の現象を解明する日が来るだろうか、それとも、本当に、「奇跡」と呼ばれるものが起きたのであろうか。「無神論者」の彼の心は、根底から揺さぶり続けられました。

「あなたの病気は治ったようですが、これからはどうするつもりですか。」と、カレルがマリー・ババイに聞くと、彼女の答えは、「聖ヴィンセンチオ・ア・パウロ修道院に入って、病人の世話をします」というものでした。

突然こみ上げてくる感動を見せまいとして、カレルは部屋を離れた、と本には記されています。

その後、彼はこの時の体験を、厳正な科学者の目を持って、ルルドにある医学検証局に臨床報告を書きました。自然科学では、説明のつかない現象が起こったことを報告したのです。そのような行為、すなわち、一般に認められている科学の領界を超える現象に関して意見を表明することは、彼の科学者としての地位を危うくするものでした。結局、彼はフランスの医学界を去ることになります。

彼が、アメリカに渡り、ロックフェラー研究所での研究成果により、最年少でノーベル生理学・医学賞を受賞する10年前のことです。

・カレルの祈り

年少のときには熱心なカトリック信者であったカレルは、付き添い医師としてルルド行きの列車に乗り込んだ時、「もし、自分の目の前で「奇跡」が起これば、カトリックに回心する！」と、彼が同僚の医師に言ったことが、記録に残っていますが、驚くことに、カレルは「奇跡」とも思える超自然的な現象を目の当たりにしても、すぐにはキリスト者に回心しませんでした。彼はそのまま、「懐疑論者」として人生を送ったのです。

その間、彼は何回もルルドの地を訪れ、ルルドで起こっている現象について、厳密な科学的な研究を行いました。「ルルドへの旅」の本の最後には、ルルドの泉の傍らに建つバジリカ教会の聖堂で、賛美歌のオルガンが聞こえる中、彼が次のような祈りを唱えたと記されています。

『 謙遜に汝によりすぎる不幸な者に助けを与えるやさしき聖母よ、
私を御身の御許にとどめ給え。
わたしは、御身を信じます。
御身はめざましい奇跡をもって、わたしの祈りにこたえ給うた。』

わたしは、まだそれに対して目を開かれていず、疑っています。
しかし、わたしの生涯の最大ののぞみ、最高の熱望は、熱情をもってすべてを信ずることであり、ふたたび分析したり、疑ったりしないことを望んでいます。
御身の名は、朝の太陽よりもやさしいひびきを持っています。
この不安に顔をゆがませ、悩める魂を持った、心の平和を失った罪人、空しく幻影を追うことに疲れ果てた罪人を、御身の許にひきとり給え。
わたしの深く、きびしい知識の誇りの警告の下には、おさえつけられた夢がなおも残っています。
確かに、それはまだ一つの夢にしかすぎませんが、すべての夢のうちで最も魅惑的なものであります。
それは、神の子どもらの輝かしい精神をもって御身を信じ、御身を愛する夢であります 』

この「ルルドへの旅」という本は、前に記したように出版を前提とした原稿により作られた本ではなく、死後、遺品の中から見つけられた彼の書付の断片を、カレル夫人が纏めて出版したものなのです。

もしかしたら、この世に出現しなかったかもしれないものです。しかしこの本の出現によって、彼が30歳の頃、「奇跡」とも思われる超自然的な体験をしながら、なお、「信仰」については結論は出さず、「懐疑論者」と「信仰者」との間を揺れ動きながら一生をかけて「信仰」を探求したということが、後世の人に明らかになったのです。彼は、まさしく若かりし日に受けたルルドでの「啓示」の探求を、生涯の終わりに至っても続けていたのです。

彼は臨終の床で、終油の秘跡（死の床で信仰を得ること）を受けたと、彼の伝記には記されています。

ここにおいて、「無神論者」、アレキシス・カレルの長い、長い「信仰を求めての旅」は終わりました。彼は、「無神論者」と「信仰者」の間の激しい葛藤のなかで生涯を過ごし、最後に「信仰者」としての安住の地に立つことができたのではないかと、わたしは深く信じています。

カレルの生涯は、「科学の皮相な生かじりは、無神論に導くことがあるが、それを十分に追求することは宗教に帰着する、ということはまったく確かである…」といった先哲の言葉が、正しかったことを示しています。

カレルに倣うなら、わたしの「人生の探求」の旅も、まだまだ続いて行くのだと、覚悟せざるを得ないと心に刻むのです。